様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ３０ 日現在

機関番号：３２６０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２３８６

研究課題名（和文）「クレオール」のフランス文学

研究課題名（英文）French literature through "Creole" writers

研究代表者
鈴木　雅生（Suzuki, Masao）

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：３０４３１８７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：「移住者の子孫として植民地にルーツをもつフランス人作家」としてカミュ、デュラス、ル・クレジオを取り上げ、文学テクストの精緻な読解というミクロなアプローチと、そのテクストを歴史的、社会的、思想的文脈に位置づけるマクロなアプローチを有機的に関連させながら、植民地の表象を重層的に分析した。これらの作業を通じて、植民地帝国主義の膨張から脱植民地化にいたる18世紀から現代までのフランス文学の流れを新たな展望のもとに捉え直すことが可能になった。

研究成果の概要（英文）：Our research concerns on French writers descent from the former overseas colonies, who condemn themselves to live in a double exteriority for the reason that they are stranger in their native land but no longer feel attached to the Metropolitan France : Albert Camus, Marguerite Duras and J.M.G Le Clezio. For the plurilateral analysis of their representation of the colony, we tried not only to read deeply and carefully their texts, but to situate them in the historical, social or ideological context. This analysis allowed us to open up new perspectives to French literature from the colonization epoch (18th century) to decolonization epoch (20th century).

研究分野：近現代フランス文学

キーワード：フランス文学　ル・クレジオ　カミュ　デュラス　植民地　クレオール

１．研究開始当初の背景

近代以降の西欧を牽引してきたフランスにおいては、非西欧世界との相互交渉 ― 接触、浸透、協力、摩擦、反撥、衝突 ― を通して、西欧にとっての「他者」というものが文学における表象として大きな位置を占めてきた。18 世紀ではモンテスキューの『ペルシア人の手紙』やディドロの『ブーガンヴィル航海記補遺』、19 世紀ではユゴー『東方詩集』、フローベール『サランボー』をはじめ、文学史上に名をとどめる作品を概観するだけでもその例は枚挙に暇がない。

申請者が遂行した「フランス 20 世紀文学における非西欧世界へのまなざし」（若手研究 (B) 平成 19-21 年度）においては、フランスの作家が「非西欧世界」をどのように捉えてきたかという観点から研究を進めたが、その過程で、植民地の存在の重要性が明らかになってきた。17 世紀以降、フランスはイギリスと並んで広大な植民地を領有しており、文学における非西欧世界の表象もその影響を無視しては語れない。

18 世紀から 20 世紀初めにかけてのフランス文学には自国の植民地の表象が数多く見られる。フランス本国で生まれ育った作家は、自らの旅のなかで一時的に滞在した植民地から文学的想像力を汲み上げるのだ。ベルナルダン・ド・サンピエール『ポールとヴィルジニー』（1787 年）におけるフランス島（現モーリシャス島）、シャトーブリアン『アタラ』（1801 年）における仏領ルイジアナ、ロチ『アフリカ騎兵』（1881 年）におけるセネガル、ゴーギャン『ノアノア』（1901 年）におけるタヒチ、フロマンタン『サハラの夏』（1856 年）やジッド『背徳者』（1927 年）におけるアルジェリア、これらは支配する宗主国の側のまなざしによって捉えられた植民地の表象であり、これまでは文学におけるエグゾティスムの文脈で論じられることが多かった。

しかし第二次世界大戦後の脱植民地化とともに、外側からの視点で植民地を描く文学に代わって、フランスの旧植民地におけるかつての被支配民族出身の作家が、宗主国の言語であるフランス語で自らの世界を描く文学が顕在化してくる。エメ・セゼール、エドゥアール・グリッサン、カテブ・ヤシーヌらの活発な活動を経て、1980 年代になるとのちにゴンクール賞を受けることになるタハール・ベン・ジェルーン（『聖なる夜』、1987 年受賞）といったマグレブの作家、ラファエル・コンフィアン（『テキサコ』、1992 年受賞）といったカリブ海地域の作家が活躍をはじめる。アルジェリア出身のアシア・ジェバールは、マグレブ出身者としてはじめてアカデミー・フランセーズの会員に選出された（2005 年）。これら「フランス語圏」の文学は今日のフランス文学のなかで重要な一翼を担うようになり、近年ではポストコロニアルの観点から注目を集めている。

だが、植民地（あるいは旧植民地）を表象するフランス文学のなかには、この二つの範疇 ―― 支配者であるフランス人の視点で外側から描くものと、かつての被支配者の視点で内側から描くもの ― に収まりきらないものがある。それは、移住者の子として植民地で生まれ育ったフランス人作家の手になる文学だ。支配者である本国出身のフランス人と異なる一方で、被支配者である現地の人々に同化することもできない彼らは、「支配者（宗主国）／被支配者（植民地）」の二分法では掬いきれない視座を体現しているだろう。けれども、語本来の意味での「クレオール」（＝植民地生まれの白人）であるこれらの作家は、個別に論じられはするものの、共通の枠組みのなかで捉えられることはほとんどなかった。

２．研究の目的

本研究においては、これまで個別に論じられていた「移住者の子孫として植民地にルーツをもつフランス人作家」を共通の枠組みのなかで検討する。具体的には、フランス系アルジェリア人の子として生まれたアルベール・カミュ、植民地に派遣されたフランス人教師を両親として仏領インドシナに生まれたマルグリット・デュラス、そして申請者がこれまで中心に研究してきた作家、18 世紀末にモーリシャス島へ移住し 20 世紀初頭までそこに根を下ろしていた家族に生まれたＪ.M.G. ル・クレジオである。いずれも自らの生まれ育った土地においては余所者の白人でしかなく、かといってフランス本国に帰属意識を持つこともできず、二重の外在性のなかに生きることを余儀なくされ、「支配者」とも「被支配者」とも異なる視点から植民地を見ているだろう。彼らの文学における植民地の表象が、エグゾティスム文学に見られる「支配する側によって外側から描かれた植民地」や、フランス語圏文学に見られる「支配される側によって内側から描かれた植民地」とどのように異なり、どのように重なるのかを考察することによって、植民地帝国主義の膨張から脱植民地化にいたる 18 世紀から現代までのフランス文学に新たな視座を引き入れることが本研究の目指すところである。

本研究の特色は、フランス文学における植民地の表象を論じるにあたって従来注目されてきた「植民地を訪れたフランス人作家の手になる文学」と「旧植民地におけるかつての被支配民族出身の作家が宗主国の言語（＝フランス語）で自らの世界を表現する文学」という二つの枠組みではなく、新たに設定する「移住者の子孫として植民地にルーツをもつフランス人作家による文学」に焦点を合わせる点にある。カミュ、デュラス、ル・クレジオというこれまで個別に論じられていた作家たちを、「植民地」という観点から語本来の意味での「クレオール作家」という共通

の枠組みのなかで捉え直す本研究は、ともすると「支配者／被支配者」という安易な善悪二元論的な図式に還元して論じがちな、いわゆるポストコロニアル批評が興隆を見せている現在において、支配者の視点でも被支配者の視点でもないこの第三の視点を導入することで、フランス文学史に新たな見通しを提示することができるであろう。

植民地表象と人文諸科学の関係については、サイード『オリエンタリズム』をはじめ、竹沢尚一郎『表象の植民地帝国』（世界思想社、2001）、石井洋二郎・工藤庸子『フランスとその〈外部〉』（東京大学出版会、2004）などの先行研究があるが、これらは主に 19 世紀から 20 世紀前半までを対象にしているうえ、フランス文学に焦点を合わせたものではない。本研究の射程は、18 世紀から 20 世紀初頭にかけてのエグゾティスムを求めて植民地を訪れた作家たちによる文学から、1980 年代以降フランス文学のなかで重要な一翼を占めるようになるいわゆる「フランス語圏文学」にまでおよび、これら先行研究の成果を補完・発展させることが期待される。

３．研究の方法

本研究の第一段階としては、これまでのフランス文学史のなかでは正面から扱われることのなかった「移住者の子孫として植民地にルーツをもつフランス人作家による文学」を明確化したうえで、カミュ、デュラス、ル・クレジオの作品の精緻な分析を通して、まずは彼らにおいて植民地がどのような位置を占めているのかを明らかにすることを試みる。

フランス系アルジェリア人の子でありフランス本国の記憶を持たない植民三世のカミュにとって、アルジェリアは唯一の故郷であった。しかしその故郷において彼は、圧倒的多数を占めるアラブ人に囲まれ「異邦人」として生きることを余儀なくされる。このことが彼の文学にどのような影響をもたらしているのか、『異邦人』や『ペスト』あるいは未完に終わった自伝小説『最初の人間』といったアルジェリアを舞台にした作品を検討すると同時に、独立をめぐるアルジェリア問題に対する彼の態度についても考察を行う。

仏領インドシナに派遣された両親のもと植民二世として生まれたデュラスは 18 才の時に自らが生まれ育ったインドシナを離れ、親から故郷として語り聞かされてきたフランスへと渡る。作家活動のごく初期に『太平洋の防波堤』（1950 年）でインドシナにおける自らの少女時代を扱った後、デュラスがふたたびインドシナを書くのは 34 年後、晩年の作品『愛人』（1984 年）においてである。そのことを考えるなら、デュラスの作家活動を、かつて自分が捨てた生まれ故郷を「再発見」する過程として捉えることも可能であろう。『太平洋の防波堤』と『愛人』で描かれるインドシナを比較・分析することでこの「再発見」の意味を検討するとともに、植民地インドを舞台にした 1960-70 年代の作品群（『ロル・Ｖ・シュタインの歓喜』『ラホールの副領事』『インディア・ソング』）を手がかりに、この「再発見」がいかなる内的必然性によって導かれたのか明らかにすることを試みる。デュラス作品の分析にあたっては、申請者と同じ機関に所属する吉田加南子氏をはじめ、国内外の専門家と積極的な意見交換を行う。

植民地出身のカミュやデュラスと異なり、ル・クレジオが生まれたのは南仏ニースである。しかし彼の両親はモーリシャス島からの引揚者であり、一族の故郷としてのモーリシャス島のことを幼い頃からくり返し語り聞かされていた。生まれ育ったフランスに絶えず違和感を覚えていたル・クレジオは、初期の作品では現代西欧社会に対する反抗や呪詛を描いていたが、『黄金探索者』（1985 年）を契機に、いわば「幻想の故郷」としてのモーリシャス島を探究するようになる。ル・クレジオの思想と文学がこのように大きく転回するに至ったのはなぜなのか、『黄金探索者』以前の小説作品のみならずエッセイや対談まで射程を広げながら検討しつつ、『黄金探索者』以降ル・クレジオの文学的想像力のなかで「幻想の故郷」がどのように変質していくかを、それぞれ約 10 年の期間を空けて発表され「モーリシャス三部作」を構成する『隔離の島』（1995 年）、『レヴォリューション』（2003 年）の詳細な分析を通じて明らかにすることを試みる。

文学テクスト自体を徹底的に読み込むこれら作業と並行して、それぞれの作家のテクストが歴史的文脈のなかで持つ意味も検討する必要があるだろう。そのために、アルジェリア、ヴェトナム、モーリシャスにおける植民の歴史や入植者の実態を把握することを試みる。歴史学や社会学の成果を参照するこの作業においては、地域研究・文化研究の専門家に分野を超えて積極的に協力を仰ぎ、必要に応じて研究打ち合わせを行って専門知識の提供を受けながら、重要な資料を選択したうえで各種資料の収集を行う。

カミュ、デュラス、ル・クレジオの作品分析の進展に合わせて、本研究の次の段階としては、「支配者」とも「被支配者」とも異なるまなざしを体現した「移住者の子孫として植民地にルーツをもつフランス人作家による文学」の特徴を、「旅行者として植民地を訪れたフランス人作家による文学」や「旧植民地におけるかつての被支配民族出身の作家が宗主国の言語（＝フランス語）で自らの世界を表現する文学」と「植民地の表象」という観点から比較することで浮き彫りにすることを試みる。

未知の土地における見聞の単なる記録にとどまらず、自らの植民地滞在から汲み上げた文学的想像力を結晶化させ、「旅行者とし

て植民地を訪れたフランス人作家による文学」の嚆矢といえるのは、フランス島（現モーリシャス島）を舞台にしたベルナルダン・ド・サン・ピエールの『ポールとヴィルジニー』（1787）である。色彩感覚豊かな自然描写によって後のフランス文学における植民地表象に大きな影響を及ぼしたこの作品を出発点に、19 世紀から 20 世紀初頭にかけて隆盛を極めた、エグゾティスムを求めて植民地を訪れた者たちの手になる文学を分析する。このカテゴリーに入る作品は厖大な数にのぼるものと予想されるため、19 世紀フランス文学、特にオリエンタリスムやエグゾティスムに関わる研究を行っている専門家と積極的に意見交換をしながら、まずは重要なテクストを選択してコーパスを作成し、そのうえで選択されたテクストの重層的な読解に取りかかり、「支配する側によって外側から描かれた植民地」を検討する。

「支配される側によって内側から描かれた植民地」を検討するにあたっては、「フランス語圏文学」がフランス文学のなかで重要な一翼を占めるようになる 1980 年代以降に主に焦点を合わせて分析する。その際には、ふたつの軸に沿って作業を行いたい。ひとつは、マルティニックをはじめとするカリブ海のフランス語圏文学である。具体的には、ラファエル・コンフィアン、パトリック・シャモワゾー、マリーズ・コンデといった作家の作品を分析の対象とする。もうひとつの軸は、アルジェリアをはじめとする北アフリカのフランス語圏文学であり、タハール・ベン・ジェルーン、アシア・ジェバール、ヤスミナ・カドラなどの作品を扱うつもりである。これらの「フランス語圏文学」を考察するにあたっては、テクスト自体の精緻な読解はもちろんのこと、それらのテクストを歴史的、社会的文脈に位置づけることが不可欠である。文学研究にとどまらず、歴史学、社会学の知見をも取り入れるために、研究集会等を開催することで、「脱植民地化」にかかわる研究を行っている各分野の専門家と積極的に研究交流を行うつもりである。

以上のような作業を通して支配者のまなざしとも被支配者のまなざしとも異なる第三のまなざしを浮き彫りにしたうえで、最終的にはこれらの成果を統合する形で、植民地帝国主義の膨張から脱植民地化にいたる 18 世紀から現代までのフランス文学を「植民地の表象」という新たな視点から捉え直すことを試みる。

４．研究成果

「移住者の子孫として植民地にルーツをもつフランス人作家」としてカミュ、デュラス、ル・クレジオの作品の分析を行うなかで、ル・クレジオの短編集『心は燃える』所収の７篇のうち主に非西欧世界を舞台にした作品５篇を翻訳し、共訳として出版するとともに、フランス語フランス文学会関東支部大会において「ル・クレジオと夢」という題で発表を行い、『関東支部論集』に論考を発表した。さらには明石書店から 2018 年 7 月刊行予定の『フランス文学を旅する 60 章（仮）』のル・クレジオに関する章を執筆した。

前述の三人の作家のテクストが歴史的文脈のなかで持つ意味を検討するための作業として、フランス国立図書館や移民歴史館にて植民の歴史や入植者の状況に関する資料の調査・収集を行うとともに、国立ヴェトナム歴史博物館やホーチミン市博物館にてフランス統治時代のヴェトナムについて調査した。当初はアルジェリアでも資料調査を行う予定であったが、国際情勢に鑑みて断念せざるをえず、今後の課題とすることにしたい。

また、「移住者の子孫として植民地にルーツをもつフランス人作家による文学」の特徴を浮き彫りにするために、その比較対象として「旅行者として植民地を訪れたフランス人作家による文学」を分析するなかで、中継基地の飛行場長としてサハラ砂漠のキャップ・ジュビーに赴いたサン＝テグジュペリの『戦う操縦士』を翻訳・出版した。もうひとつの比較対象として「旧植民地におけるかつての被支配民族出身の作家が宗主国の言語で自らの世界を表現する文学」の分析も行い、特に北アフリカのフランス語圏文学についての知見を深めることができた。

これらの作業を通じて、植民地帝国主義の膨張から脱植民地化にいたる 18 世紀から現代までのフランス文学の流れを新たな展望のもとに捉え直すことが可能になるとともに、「移住者の子孫として植民地にルーツをもつフランス人作家による文学」に焦点を合わせた研究を今後さらに進めるための基盤を作ることができた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

鈴木雅生、「ル・クレジオの「夢」」、『関東支部論集』、日本フランス語フランス文学会、第 26 号、2017 年 12 月、p．77-90．

〔学会発表〕（計１件）

鈴木雅生、「ル・クレジオの「夢」」、シンポジウム『20 世紀文学と夢』、日本フランス語フランス文学会関東支部大会（東京外国語大学）、2017 年 3 月 4 日

〔図書〕（計２件）

鈴木雅生（翻訳・解説・年譜）、サン＝テグジュペリ『戦う操縦士』、光文社古典新訳文庫、2018 年、338p.

鈴木雅生（翻訳）、ル・クレジオ『心は燃える』、作品社、2017 年、198p（p.89-176）

６．研究組織
(1)研究代表者
鈴木　雅生（SUZUKI MASAO）
学習院大学・文学部・教授
研究者番号：30431878